

## まちがいがなし

2枚の絵を見くらべて、まちがいを8カ所見つけてね。全問正解された方のうち、抽選で10人の方に図書カードをプレゼントします。

とうふねこ座：市川雅子 画



応募締切 12月11日(金)



### 応募方法

ハガキまたはファクスに①答え(左の絵に○をつける)②住所③氏名(ふりがな)④年齢⑤電話番号⑥広報紙の感想、ご意見などを書いて秘書広報課(〒443-8600 1F)へ。なお、当選者の発表は、FAX 66・1190へ。なお、当選者の発表は、発送をもって代えさせていただきます。

### 山争い(二色町)

今より350年昔のこと。一色村と深溝村の間に小原山という山があった。村人たちはこの山で刈った草を牛や馬のえさにしたり、田畑の肥料にしていた。小原山は大事な生活の山だったが、2つの村の山争いが絶えなかった。村長「みんな、聞いてくれん。最近深溝村のもんが小原山に入りこんどるそうだから、どうしたらいいかのん」  
茂作「けしからん!小原山は昔から一色村のもんと決まっとるぞ」  
長介「ほーだ!深溝村のもんを追い出せ!」  
五郎助「そいでもなあ、わしらも山を使うが、わしらの村のもんだとは言い切れんぞ。どちらの村にとっても大事な山だ。どうしたら深溝村と話し合ってみたら」  
長介「何言つとるだん。ほんなことしたら先祖からの草刈場を取られちゃうぞ」  
五郎助の言葉はなかなか受け入れてもらえなかったが、彼はなんとかして2つの村が平和に小原山を使うようにできないかと悩み、日々奔走していた。

9月12日の夜、宗徳寺の鐘が鳴り響き、一色村の人々が寺に集まり小原山へ向かうと、深溝村の人々もやってきていた。両村で小原山はどっちのものなのか調べて決めようというのだ。どちらもピリピリしていたが解決できず、3日後あらためて話し合いをすることにして解散した。14日の夜、一色村の人々が明日のために支度を整えて小原山のふもとにやってくる。そこには村境の新しい杭が打ち込まれていた。山頂から深溝村の人々がこちらを見張っている。

その時、一人の男が杭を抜こうとした。五郎助だ。彼は話し合いを無視して勝手に杭を立てたことが許せなかったのだ。それとたん両方の村人たちが一斉に攻め込み、争いが始まった。  
ゴロンゴロン!山頂から数個の大岩が落ちてきた!みんなはあわてて逃げたが、五郎助は杭を持ったまま大岩の下敷きになって亡くなってしまった。

村のために尽くしてくれた五郎助に村の人々は深く感銘を受けた。両方の村は反省し、きちんと話し合いをして村の境界を決めた。  
茂作「あれから深溝村とケンカもなくなったなあ。これも五郎助さんのおかげじゃ」  
長介「ほっじゃ。みんなで五郎助さんのために立派な墓を作るまいか」

『桑原五郎助之碑』は現在宝喜神社の裏手に建っています。

- 【参考資料】
- 『郷の光 一巻』形原小学校
  - 『形原』町部青年聯合会
  - 『蒲郡のむかしのななし』
- 形原北小学校・PTA

### ◆10月号の答え

